

## 「ビルマからの手紙」から「独立 70 周年」まで

2011 年 3 月のミャンマーの民政移管の翌 2012 年 4 月の大統領来日に先立ってミャンマー連邦共和国建設省視察団が来日(3 月 4~9 日)、現地案内のお手伝いをしたことがきっかけになって、案内人メンバーを中心にした「二都物語研究会」というミャンマー研究会が 9 月にスタート、UR ワンゲル同好会は設立 40 周年記念のミャンマー・ビクトリア山登山の参加メンバー集めを開始しました。

その頃からミャンマー関連の新聞記事の切り抜きを始め、クリアファイルに保存してきました。私の古くからの購読紙・毎日新聞が主体ですが、他の新聞記事も少し混じっています。6 年余りの記事の見出しを羅列し二つのステージに分けて整理してみました。第 I・第 II ステージの境界線は厳密ではありませんが、民主化後初のミャンマー総選挙に向けた記事が出始めた頃で分けています。

※共感を覚えた部分にはアンダーラインを引いてまとめています。

## 第 I ステージ 2011 年秋から 2014 年末

- 2011 年 11 月 18 日 ASEAN 議長国にミャンマー・資源めぐり火花
- 2012 年 4 月 20 日 Mekong-Japan Summit Special(The Japan Times)
- 2012 年 8 月 1 日 ミャンマー大型特区受注 三菱商・住商・丸紅など日本連合(日経)
- 2012 年 8 月 28 日 ミャンマー開発競争・アジア最後の未開拓地マネー殺到(朝日)
- 2012 年 12 月 29 日 貧困層に根ざす伝統医薬・“開国”で流出の懸念
- 2013 年 4 月 6 日 改革失速させぬ・報道の自由加速
- 2013 年 4 月 16 日 「ビルマからの手紙」18 年・スーチー氏本社来訪
- 2013 年 4 月 17 日 ミャンマー経済制裁緩和・活況最後の開拓地
- 2013 年 4 月 25 日 記者の目・スーチー氏来日「真の国民和解」に期待
- 2013 年 5 月 25 日 日本とミャンマー・インフラ支援が重要だ
- 2013 年 5 月 26 日 アウンサン廟公開へ・30 年ぶりミャンマー開放アピール
- 2013 年 6 月 2 日 ビルマからの手紙2013<sup>4</sup>日本の人たちと結ばれた運命の絆・若者の支持温かく  
時代の風「共通の歌がない国は」
- 2013 年 7 月 29 日 ビルマからの手紙2013<sup>6</sup>命すら惜しまず戦った英雄たち・彼らの夢を実現しよう
- 2013 年 9 月 1 日 日曜に想う・平成のおしんミャンマーで待つ(朝日)
- 2013 年 10 月 25 日 経済観測・ミャンマーは日本が好き?
- 2013 年 11 月 5 日 ミャンマー宗教暴動・ビルマ族への恨み転化
- 2014 年 12 月 8 日 改憲 少数民族と協力・民主活動家が来日講演

最初の記事は、民政移管から半年が過ぎた 2011 年 11 月の記事、ミャンマーが 2014 年に行われる東南アジア諸国連合の議長国就任を決めたことを伝え、「資源めぐり火花」という見出しで、軍事クーデターで国際社会から孤立し米欧の経済制裁で ASEAN 最貧国に甘んじてきたミャンマーが、今後の魅力的な投資先・市場として、アジア全体のパワーバランスに変化をもたらしそうだと書かれている。急速な民主化の流れを背景に経済制裁の解除が進み、国際社会への復帰が望まれるミャンマー、次のジャパンタイムズの記事「Mekong-Japan Summit Special」は東京で開かれた「日本・メコン地域諸国首脳会議」、議長国日本は野田総理、カンボジア・ラオス・タイ・ベトナムの首相、ミャンマーはテインセイン大統領が出席、ティラワ経済特区開発への日本の協力等が話し合われている。その後もミャンマーの豊富な資源と低廉な労働力に各国の企業が注目、第 I ステージは 2012 年 8 月 28 日の記事にあるような「ミャンマー開発競争・アジア最後の未開拓地マネー殺到」といった報道が続く。

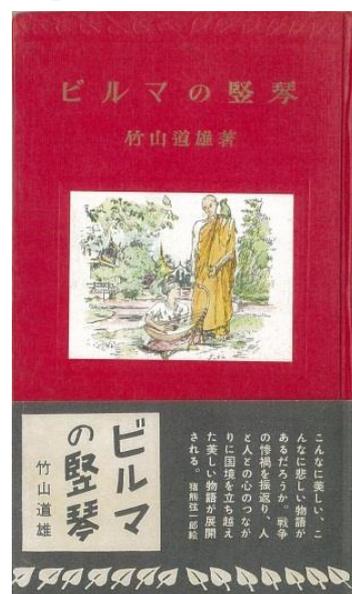
2013 年 4 月 16 日付の「ビルマからの手紙 18 年・スーチー氏本社来訪」の記事は、スーチーさんが 27 年ぶりに来日し、厳しい報道規制が敷かれた旧軍政下の 1995 年から「ビルマからの手紙」の連載を始めた毎日新聞社を訪問したことを伝えている。繰り返される自宅軟禁、巧みなレトリックで軍政を批判し連載と中断を繰り返しながら、7 年半に及んだ 3 回目の軟禁解除後の 2011 年 1 月に「手紙」が再開された。

アウンサンスーチーさんが日本に伝えたい「ビルマからの手紙」、2013 年 6 月 2 日付の 2013<sup>[4]</sup>では、「日本の人たちと結ばれた運命の絆・若者の支持温かく」という見出しで 4 月 15 日に龍谷大を訪れた時の写真を載せて、日本の若者たちへの期待の気持ちを伝えている。

同じ紙面には中西寛京大教授の時代の風「共通の歌がない国は」が載っている。「ビルマからの手紙」と並んでの掲載から終戦直後に児童文学として書かれた「ビルマの竖琴」を取り上げて竹山道雄の戦争観にも触れ、昭和の自由主義的な教養人で歴史観も良心的かつ良識的だったと書いている。タイトルの「共通の歌がない国は」というのはミャンマーと日本ではない。どこの国を指しているのかは第 II ステージで触れることにしましょう。

#### 「命すら惜しまず戦った英雄たち・彼らの夢実現しよう」

7 月 29 日付の「ビルマからの手紙」2013<sup>[6]</sup>では、1947 年 7 月 19 日暗殺された父のアウンサン将軍と 8 人の同志のことに触れ、彼らの夢見た平和も統合も繁栄もまだなし得ていないと書いているのである。このアウンサンスーチーさんの想いをフォローしていると感じたのは、2014 年 12 月 8 日付「改憲 少数民族と協力」の初来日した民主化運動の指導者ミンコーナイン氏の講演を伝える小さな記事を、2015 年の総選挙は最後の目標ではなく停車駅にすぎない、憲法をどの程度変えられるかが非常に重要なポイントと述べている。



## 第Ⅱステージ 2015年から2018年まで

- 2015年 7月 2日 植物図鑑で森守れ・ミャンマー有用識別へ作製中(東京)
- 2015年 8月 20日 11月に民主化後初の総選挙・動く外資内需にも照準
- 2015年 9月 19日 未来を変える占星術・独自に発展 政策を左右
- 2015年 10月 8日 選管の中立性 疑義・来月総選挙 膨大なミス
- 2015年 10月 9日 ミャンマー総選挙 買収の影・与党有権者に金品
- 2015年 11月 2日 対IS イスラエルと連携・ロヒンギャ選挙権剥奪
- 2015年 11月 14日 ミャンマー市場に期待・日本企業「成長の余地」
- 2015年 11月 24日 ミャンマー民主化への祈り・NLD 勝利は国民の決意の表れ
- 2016年 11月 4日 スーチー氏来日・国造りの意欲伝わった
- 2017年 9月 15日 行き場失う少数派・ミャンマー「民族」と認めず
- 2017年 9月 24日 **時代の風**「国際関与日本が主導を」
- 2017年 11月 16日 ミャンマーセミナーin ヤンゴン・アジア最後のフロンティア
- 2018年 1月 4日 **ミャンマー独立から70年** 民族融和いまだ遠く

2015年8月に「11月に民主化後初の総選挙・動く外資内需にも照準」、10月には「選管の中立性 疑義・来月総選挙 膨大なミス」と「ミャンマー総選挙 買収の影・与党有権者に金品」、そして2015年11月2日の「対IS イスラエルと連携・ロヒンギャ選挙権剥奪」と総選挙に向けての記事が続く。そして11月8日の総選挙で、最大野党「国民民主連盟」の政権実現後は「ミャンマー市場に期待・日本企業成長の余地」「ミャンマー民主化への祈り・NLD 勝利は国民の決意の表れ」という見出しも見られたが、多民族国家の苦難の道を今も歩み続けている。

2017年9月24日の**時代の風**「国際関与日本が主導を」の記事が眼を引く。第Ⅰステージの2013年6月の**時代の風**「共通の歌がない国は」にも登場した中西さん、その時の記事は竹山道雄の「ビルマの豎琴」を「竹山道雄と昭和の時代」という評伝も紹介しながら詳しく解説して歴史認識問題に焦点をあてていた。そして明治から昭和戦争期にかけての日本社会は、欧米との間では文化を共有していたが、アジアはあくまで活動の舞台であって、文化を共有する対象ではなかった。史上かつてないほど深くかわったはずの植民地時代の韓国、中国と日本が「共通の歌」を持ち得なかったとして、両国との歴史認識の相違の根深さを軽視してはならないと指摘していた。

4年前のその言葉をうけての続編だろうか今回の記事では、日本国内では解散総選挙に向かって世の関心がそれ一色になりつつあるのに警鐘を鳴らし、東アジアのもう一つの重要な国際問題を忘れてはならないとロヒンギャ問題を取り上げている。「錯綜した問題の背景を少ない字数で正確かつ公平に記することは不可能だが要約を試みる」と断りながら、18世紀末ビルマ人王朝がラカイン地域にあったミャウー朝という仏教系の

王国を征服、19世紀初期イギリスがビルマ人王朝を征服と歴史を辿りながら、ロヒンギャはイギリス征服後にベンガル地方から移入してきたイスラム教徒、自らをミャウー朝時代から居住したイスラム教徒の子孫と位置付ける。第2次世界大戦後ロヒンギャの市民権を認めたと、1962年クーデター後は英統治下で流入した移民として国籍認めず、軍政下で仏教系ラカイン住民との対立深まり暴力的紛争が発生、状況が深刻化し現在に至っていることを民族と宗教のあつれきに触れながら解説している。そしてロヒンギャ問題の根は深く、大半のミャンマー国民がロヒンギャへの国籍付与に強い抵抗感を抱いている現実、現在の憲法下で軍、警察は国軍勢力が握っている状況下で問題解決を求めてスーチー氏に圧力をかけることは現政権の瓦解にもつながりかねないと冷静に見つめて危惧し、もし国際社会がロヒンギャ問題を放置すれば、ミャンマーの民主化を頓挫させて地域を不安定化し、イスラム過激派のアジアでの浸透を強める要因にもなりうる、第2次世界大戦時には仏教徒とイスラム教徒を日英双方が組織化して戦闘させたので、歴史的にも日本はこの問題に関わっていると指摘している。

### 「ミャンマー独立から70年・民族融和いまだ遠く」

今年・2018年の正月4日の毎日新聞が、ミャンマー独立70年記念の特集記事を組んだ。その頭書きは「1948年1月4日に英国から独立を果たして70年を迎えた。独立の立役者となったアウンサン将軍は、その前年に暗殺され、理想とする国造りはいまだ道半ば。今は娘のアウンサンスーチー国家顧問兼外相が、民族・宗教の対立を超えた国民統合に取り組んでいる」で始まり、紙面の右には1886年から始まる「現代ミャンマー略史」を掲載している。

特集の最後には、ジャーナリストチョウソワモー氏の「**全国民の結束 理想の道**」という寄稿文を載せているが、そのまとめの文章は「アウンサンスーチーのゴールは父アウンサンがこの国にかけた思いを実現することだ。父の独立戦争は帝国主義という明確な敵を相手にしていたが、スーチー氏の場合敵は広範囲にわたり見えにくい。国を真の民主化に導く使命をおび、真の独立を得るための「第2の独立戦争」に挑んでいる。それは困難だが不可能なことではないはずだ。」という激励の言葉で結んでいる。

この締め言葉に共感し、私の新聞切り抜きも終わりにしました。その後もミャンマー関連のいろいろな報道が続きますが、独立70年・理想の道を歩み続けるミャンマーを応援しましょう！

## 現代ミャンマー略史

1886年	英領インドに編入される
1915年	アウンサン将軍が生まれる
41年	太平洋戦争勃発。アウンサンらがビルマ独立義勇軍結成
42年	日本軍とビルマ独立義勇軍がビルマから英軍を放逐
43年	日本が「独立」を認める
44年	アウンサンが抗日組織を結成
45年	日本の敗北で太平洋戦争終結
47年	アウンサンと英国が独立で合意。アウンサンが暗殺される
48年	ビルマ独立
62年	クーデターでネウィン将軍が実権掌握。軍事政権スタート
88年	アウンサンスーチー氏が英国から帰国。民主化運動を軍政が弾圧し多数の死者
89年	国軍が国名をミャンマーに改称。スーチー氏、最初の自宅軟禁に
90年	約30年ぶりの総選挙でスーチー氏率いる国民民主連盟(NLD)が圧勝。軍政は結果を受け入れず
91年	スーチー氏がノーベル平和賞受賞
2008年	国民投票で、軍政主導で起草された新憲法を承認
10年	総選挙で軍政翼賛政党が勝利
11年	テインセイン大統領が就任し、民政移管



独立に向けた交渉をするため英首相官邸を訪れたアウンサン将軍。ロンドンで1947年1月、AP



クーデターで実権を掌握したネウィン(右)とアウンマイ(現ヤンゴン)で1962年12月、AP



テインセイン大統領。2015年4月9日、春日孝之撮影

12年	スーチー氏が補選で当選し、議員に
15年	総選挙でNLDが圧勝

